

ララのいない卒業式 届け、未来へつながるイマジネーション！

うさペン

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ララのいない三年生の卒業式を書きました。ひかララメインです。いちやいちやというよりも、原作を尊重した仕上がりになるように意識はしました。

ララのことを思い出して悩むひかるといふ要素はもちろんありますが、あんまりウジウジした感じにはならないようにはしているので気軽に見てもらえれば嬉しいです。

あらすじ

卒業式二週間前、ひかるはララのことを頻繁に思い出し、そのことで悩んでいた。

遼じいと姫ノ城はそんなひかるを諭すような言葉をかけるも、ひかるの不安は消えることはなかった。

そんな中で迎えた卒業式の日、ひかるはララという理想の卒業式を夢みてしまう。

理想と現実のギャップ、その中でひかるは何をつかむのか。思い出と約束の果てにある答えとは。

本編では描かれることのなかった卒業式の幕が今あがる。

目次

ララのいない卒業式	前編	1
ララのいない卒業式	後編	16

## ララのいない卒業式 前編

「遼じい、今日も系外惑星が見える宇宙をみせてほしいな」

「そうかい、じゃあそうしておくね」

遼じいにそれだけ伝えると、プラネタリウムの中へと入っていく。誰もいない一人だけの空間。そこは宇宙と同じだ。

暗いけど、明るい星星に囲まれ、今日もわたしは一つの星となって夜空をみつめる。

ここは今は冬空であろうとも時間を超えて星と出逢うことができる、星のエントランス。

星と向かいあい、想像力を解放させる時間だ。

今、星座づくりではまっていることは、宇宙の暗闇の中で普通にはみることができない系外惑星を想像しながら星座を描くことだ。

「どこかな、どこかな」

これまでよりも自由は発想でより想像が無限大に広がっていく。

系外惑星とは太陽系の外側にある遠い遠い星達。太陽系外の惑星は恒星とは違って自ら輝くことがないため従来の観測技術では発見しづらく、発見するためにはトランジット法という方法が用いられることが多い。この観測技術の登場により二千六百以上の系外惑星が発見され、その中に地球と似た惑星が二十個ほどあるとされている。

地球よりも遠くて、星空よりもずっとずっと近い、もしかしたら地球外知的生命体がいる星。そんな星々を想像するだけでもキラやばく☆なので、星座を作っついてもキラやばく☆な気持ちになれる。「ここに星があつて、ここにも星があるから」

なんていいながら暗闇の中の存在している星々をつなげていき、「ララ。みてみて、あの星と星がね！」

ここにはいないララに話しかけていた。

星空をみつめ、ここにいない人のことを想うと、キラキラしていた気持ちに陰りができた。

ここ最近はずいぶん解らないけど、ララがいるかのようにふるまってしまうことが多くなっている。

(なんでだろう、どうしてだろう)

知りたくでたまらないことなのに答えを見つけることはできていない。

卒業式まで残り二週間ちよつと。心がざわつくことは増えてきた。もうすぐ卒業だつて思う度に、記憶の中に大事にしまっておいたララの記憶が星のように強く輝きだしてしまう。

プラネタリウムの星空には秋の星空が光り輝いている。

他の季節の星座よりも明るい星空が少ない星模様。

寂しげなんて言われたりもするけど、全然そんなことはない。

見方を変えて、想像力を広げていけば、星は強く強く輝きはじめるんだあ。

「秋の星座はまずはペガサス座をみつけると解りやすいよ」

「ペガサス座、どれルン」

「秋の四辺形っていつてね、まずはペガサスの胴体から探してみるといいよ。ほらあそこ、あそこ」

指を指してどこにあるのか方角を示してあげて、星空の案内人となる。

アルフェラツツ、シアトル、アルゲニブ、マルカブからなる、秋の四辺形は秋の夜空の位置関係を知るのにもってこいの星だ。

「あれルン！ やつとみつけたルン」

あ、みつけてくれた。やっぱ嬉しいなあ。

「それがわかれば後は顔と足をみつけてみて。ペガサスの胴体の近くにある一番輝きが強いの星エニフ、あれがペガサスの頭だよ」

「あ、だんだんと解ってきたルン」

ただのひとつひとつが点だったものがつながりあうだけで、キラやばく☆な気持ちになつていく。それは宇宙人であるララであつてもなにも変わらなかつた。

「これがペガサス座、なんか壮大ルンね」

「ペガサス座みるとフワのこと思い出すよね」

「そうルンね」

成長したフワはペガサスのように姿が変わった。それはペガサス座と似ていると言ってもいいだろう。

「今さ、新しいペガサスになったフワ座をつくってる最中なんだ」

ペガサスになったフワ座を想像する。フワをみつけたときは一人でわくわくしながら星空を探検するかのよう探したけど、今はララがいる。

「ペガサスになったフワ座……まずは胴体からさがすルン」

「うんうん。ペガサス座は四辺形だけど、ペガサスになったフワ座は丸型胴体だと思うんだよね」

「丸形ルンか」

「だからね。あそことあそこの星をつなげれば、ほら丸になるんだよ！ でねでね、あの一歩強く輝いてる星が頭になって、青いあの星を尻尾にみたてたら、ペガサスになったフワ座の完成！ キラやばく☆」

「本当ルン」

新しい星座をみつけて描く度に、キラキラをわたしとララの心は輝いていく。

「みてみて、まだまだいろいろ考えてきてるんだ」

描いてきたフワ座の星をララにたくさんみせていく。

「え、これなにルン」

「これも新しいフワ座だよ！ フワって星座の力受け取ったときに姿が変わってたから、また姿変わるかなって。今度はもっと壮大に！

ビックに！ だから星座も大きく、ってね！」

フワは増殖したりもしてたくさん星空で輝いてるはず。

どこをみてもフワがいて「フワ〜」って、わたし達のことをみてる、キラやばく☆な星座間違いなしだよ。

「ひかる、たぶんフワはこれ以上姿が変わらないルン」

急にララが冷めた目になり、諭すように肩を叩かれた。

「え!? なんで?」

見当がまったくつかない。知りたいよ、どうしてそう思うのか。

「フワは十二星座の力を全部集めてあの姿になれたルン。これ以上は

星座の力がやどることはないルン」

「え〜そんな。もっと見たかったなくフワの変わるところ。あ！でも想像ならできるよ。ララもしようよ〜」

「しよがないルンね〜」

強引な誘い方だったけど、ララもノリ気になって、新しいフワの姿を描いていく。

「しし座だとたてがみがもっと増えるって感じかな」

「あ、それいいルン」

「だったらこことここの星をつなげないと。あくそれだったら全体を大きくして」

「そんなにでかい星座ってありえるルン。フワはもっと小さいルン」

「じゃあ大きくなったフワってことにしようよ」

「とうとつすぎルン！」

「そうかな。もっと成長したフワにわたしのつてみたいっておもうけど」

ララはちよろちよろと触覚を動かしながら考え、

「成長したフワ、のつてみたいルン」

フワに乗るきになった。

「でしょおお！ フワ、ペガサス座みたいになってくれないかなあ。

いっぱい食べたたら、一杯成長するのかな」

「ひかる、お腹一杯食べさせるのは駄目ルン」

「だよね〜」

大きくさせるために食べさせすぎちゃ駄目だよね。気長に成長を見守ればいいんだけどなあ。

「フワが成長するまで、わたし達つてそばにいられるかな」

知っている、この疑問に対する回答は。それでも言わずにいられないのはそのことをわたし自身が自覚したいがためだ。

「トウインクルイマジネーションが集まれば、みんなとはお別れルン」

「うん、解ってる。だからこそ楽しくいよう、もっとキラやば〜☆でい

よう。もっとイマジネーションを膨らませようよー！」

「ルン」

ララはわたしの想いに答え、わたしはわたしらしくなっていく。

それがララとの日常。あの頃の日常だったんだ。

「卒業まで後二週間、ずいぶんと早いものだねえ」

声が聞こえる、これは遼じいの声だ。

心の奥底にまで響く遼じいの声を聞くと不思議と落ち着く。ざわついたものが少しおさまっていく。

「うん、あつという間だった」

ララがいなくなつて、えれな先輩、まどか先輩が卒業して、一人の時間は多くなつた。

その時間を使って、これまでよりも宇宙のことを、地球のことを、たくさんたくさん調べるようになった。ララと約束を果たす、そのための知識を得るために。

勉強ばかりではない、新しい友達もできた。以前クラスメイトだった子とも仲良くしていて、特に姫ノ城さんとは親しい関係が続いている。

あの選挙以降、姫ノ城さんのことをよくみるようになったし、姫ノ城さんもわたしをきにかけてくれもしている。

目標もできて、友達もいて、充実した日々。過ぎ去っていく時間もあつという間だ。

「あれだけ小さかったひかるが中学を卒業するんだねえ。わたしは嬉しいよ。成長していくひかるの姿をみれるのは」

「わたし成長できてるのかな？」

すべてが充実したかのような日々ではあるのだけど、不安はあつた。

さびしさがそうさせる。さびしさが時々顔を出してしまうから。

「どうしてそう思うんだい」

「どうしてかなあ……最近ね、よく昔のことばかり思い出すんだ。まだ遠くない出来事のはずなのに」

昔を振り返ってばかりいることに焦りみたいなものはないけれど、このままではいけないようなきはしている。



さびしい気持ちはいつまでもひきずっていたら、きつと前には進めない。

「昔のことに思いをはせる……いいじゃないか、わたしもよくするさ。いや、多くの人がそうしてきている。古代から続く立派な習わしさ」  
星を眺め、自分のことのように遼じいは語ってくれる。遼じいもそうしたことがあるんだろうな。

「どうしてみんなそうしてきたのかな？」

「つながっていたいのさ、日常の中ではつながれないものと。そうして人は大切なことにきずいていく。一步一步そうやって進んでいけばいいさね」

「そうだといいんだけど、わたしは……」

遼じいの言葉の意味はなんとなくは理解できる。

星座のようにつながった大切な思い出は、わたしをキラキラと成長させてくれた。

でもわたしは星座のようにつながった思い出を大事にしすぎてしまっている。

このままそこにとどまり続けてしまうのが怖い。

会えないのが、さびしいままにいるのが怖いんだ。

\*

\*

\*

「バレンタイン、彼氏の反応どうだった」

「ねえねえ、あの先輩には告白できたの」

学校の廊下を歩いているだけでちらほらと浮き足立った女子の聲が聞こえてくる。

卒業式の前、みんなも心が慌ただしくなっているけど、それは別な理由だ。

恋人であったり、なかったり、もうすぐ去ってしまう三年生に自分なりのアクションをしていた。

「もうすぐ卒業式だからさ、みんな落ち着かないよね〜」

庭につき、ベンチに座ってお弁当を食べながら姫ノ城さんに話かけると、

「わたくしはそんなことありませんわよ。なにせ観星中の金星、どっ

しりと構えているのが当たり前でなくて。あなたも観星中の銀河ならば、どつしりとお構えなさい」

後光が射しているかのように姫ノ城さんはビカッと金星のように輝きだした。

「どつしりかゝじゃあちゃんと彼にはチョコを渡せたんだ」

「ええ、そりゃあもうどつしりと。けしてうろたえたりはしませんでしたよ、うろたえたりなどは……オホホホー」

さきほどまで金星のように輝いていた姫ノ城さんは女子らしくもじもじと手をこすり合わせている。言動と行動が噛み合って全然ないところ、とつてもかわいいなあ。

「つて！ あなたまでその話ですか！ もう散々しましたわよ」

「えゝわたしだって聞きたいよゝそれから彼の反応はどうだったの」

「彼は美味しいとだけ」

「そっかそっか」

「そ、それと！ ホワイトデーはちゃんとお返しをしてくださると「うんうん」

変に茶化すようなことはせず、嬉しさを隠せない姫ノ城さんに寄り添うように聞いていく。恋ってこんなにも女の子を変えちゃうんだ。「わたしき、姫ノ城さんがおつき合いするなんて、昔は考えもしなかつたなゝ」

「わたくしもですわ。まったくいつも強引で……それでいて放つておけないんですわよ」

「でもそんな彼がみつけてくれたんだよね、姫ノ城さんの小さなきづかいを。誰からきずかされることもなくさ」

「そうでしたわね。つて、思い出話なんてさせるんじゃありませんわよ」

怒っているかのようにには言っているけど、その口調はやさしげで、とつても彼のこと大切にしているのが解る。

大切な人、大切な想い、それはきつと誰にだってあるもの。

「変なこと聞いてもいい？」

そんなきずきがわたしの中にある好奇心を刺激してしまう。

「そんな顔をして……早く言いなさいな」

なんとなく察しているような感じはする。姫ノ城さんは大きな事をいうけれど、細かなきづかいにきずける人。今もわたしにちよつとした変化にきずいている。

「卒業したらさ、姫ノ城さんは彼と離れ離れになってしまう。なんていえないのかな、本当はどうしたいのかなって」

「どうしたいですか……それはわたくし達が決めることではありません。時が進めば道はそれぞれ違っていき、その道に従い進んでいくのみ。たとえ道が交わらずとも」

姫ノ城さんは強いな。金星のように輝き続けるための強さがある。

道を進み、道を導く者としての覚悟が彼女にはあった。わたしにはないものだ。

「ですが彼といたいということも思ったことはわたくしですらありません。大切な人とわたくし達は突然離れてしまった、だからこそなのかもしれません」

でもそんな姫ノ城さんはララのことを覚えてくれている。別れすら姫ノ城さん達は言えずにいたっていうのに。

——ララと別れた翌日の学校

「あれ星奈、ララルンはどうしたんだよ。あ、まさか喧嘩でもしたのか」

登校し、教室に入って話しかけてきたカルノリにどう返答すべきか迷ってしまう。

ララの事、みんなにしつかり話そうと思ってここには来たんだけど、どうにも言葉がでてこない。あれ？　なんでだろ。

「……………ううん、そうじゃないよ」

「じゃあどうしたんだよ？」

あれ違うの？　みたいな顔でカルノリはいる。ちゃんと話さないと、ちゃんと。

「あのね、みんな聞いて欲しいことがあるの」

大きく息を吸ってからクラス中に響く声をだし、みんなの注目を集

めた。

「星奈さん、どうされましたか」

姫ノ城さんがいち早く、駆け寄ってきてくれた。

「ララのごとで、みんなに話さなくちやいけないことがあって……ララさ、遠くの星へ帰らなきゃいけないなつちやたんだ」

「うそ、ルンちゃんが……ルンちゃんはまだ地球にいるんだよね」

「えっと、それは……」

もういないってしつかり言わないとだめなのに声が詰まる。あれ、どうしてだ？

「急でね、本当急で。帰らなきゃいけなくなつて」

言わなきゃいけないこと、みんなに解ってもらわなくちやいけないことがたくさんあるのに、感情的にしか話せない。つらいよ、なんかつらいの！

「どうしてそんな急に。羽衣さん、お別れくらいは言ってくれれば」

「ごめんね。本当に急なこと。ごめん……」

「あなたが謝ることではないですわ。先生にはお伝えしましたか」

「それもまだで……」

「星奈さん、いっしょにいきますわよ。まずはその涙をお拭きなさいな」

「え？ あれ？」

姫ノ城さんがきずいてくれるまで、泣いてることにすらきずかなかった。

ララがいなくてという現実がそこにあつて、ララのごとはそれ以降みんなには話せていない。

わたしはお別れが言えたのに、みんなはそれができなかつた。

わたしだけがちゃんとお別れができて、それなのに……

「星奈さん、ひかる！」

「あ……」

姫ノ城さんの強く放つた声が聞こえて我にかえる。

またわたし、どこか違う場所へ行つてたんだ。

「あなたがわたくしにこのような質問をなさるのも、卒業式が近づくにつれて考え事をするようになったのも……ララさんのことですよね」

姫ノ城さんはためらないがらも核心をついてくる。みんなが踏み込みづらいと思っていることでも踏み込んでくれた。

だから少し安心する。なんでだろうな。

「うん……わたしは姫ノ城さんみたいに強くなれてないんだ。ララとお別れだつて言えて、ちゃんと気持ちの整理をする時間だつてあつた。それなのに今のわたしはまだ囚われている。ララのために卒業式をしたいつて考えて、姫ノ城さんにも手伝ってもらつた。卒業という日をもうすぐ迎えようとしているのにさ」

強くなりたい、強くありたい、そう願えば願うほど自分の気持ちが歪んでいく。

どうしてかは解らない。知りたい、知りたい、どうしてこんなにもわたしは弱いんだろう。

自分のことを知ろうと何度も何度もララと向き合つても、返ってくるのは変わらない現実だけ。知りたいという好奇心だけは超えられない、それだけではだめなんだつて思うけど、それ以外の方法をわたしは知らなかつた。

「そのどこが行けないことなのでしょう。わたくしはさっぱり解りませんですわ」

「でも姫ノ城さんはしつかり自分の道を進もうとしている」

「わたくしではなくあなた、あなたはそうしたいのですよ。だつたらそうするのが正しいことではなくて。大切なものを失つても平然としていられるほうが困ります」

泣き出しそうにもみえた表情から一転して、みたこともないようなやさしい笑顔で姫ノ城さんはわたしと向き合つてくれている。わたしの震えた肩をつかみ、よりそおうとしてくれる。

「大丈夫ですわ。あなたは変われる。だつてわたくしを変えてくださったのはあなた方です。ときには生徒会長選挙で戦い、プリキュアとしてわたし達を守ってくださいました」

「今のわたしはもうプリキヤアじゃないよ」

「でなければどうだというのですか。この先もそのままだと。あなたは観星中の銀河。こんな所で終わるはずがありませんわ。だから信じなさい、もつとあなた自身のことを」

姫ノ城さんの気持ちや熱意が悪いわけではない。悪いのはわたしだ。

これほど自分のことを支えようとしてくれているのに、気持ちのうえではまだ変わることができなかった。

「ありがとう、姫ノ城さん」

それでもこれ以上心配をかけさせまいと偽りの笑顔の仮面をかぶる。

うそなんてつきたくない。つきたくないのにつけてしまう。

こういつた汚いぶぶんだけは変わってしまった。変わってしまったんだ。

「解ってくださいればいいのですわ。そろそろ授業がはじまりますわよ」

嬉しそうにしている姫ノ城さんを見て、わたしはどこか安心していった。

ララの卒業式を開くための手伝いまでさせてるのに、これ以上は巻き込んではいけない。これはわたしの、わたしが解決しなければいけない問題なのだから。

\*

\*

\*

「卒業かくあつという間だったね」

「いろいろ大変だったルン」

桜吹雪が舞う桜並木でララと一緒に歩いていた。春の咲く小雪は一面を鮮やかなピンク色に染め心すらもやさしくつつんでいく。

天気も快晴、桜も満開。そして隣にはララがいるすべてが理想どおりの夢の世界。

幸福で、嬉しくて、喜びに満ちている。

現実みが少ないような気がするけど、今はそんなことはどうでも良かった。ただここにさえいられるのが嬉しい。それでいいんだ、そ

れでいい。

「日本語も自力でこんなに話せるようになったルン。これもひかるのおかげルン」

「ララが努力したからだよ」

「努力できたのはひかるが側にいてくれたからルン」

ぎゅっと手をにぎって、ララが微笑むと、キラキラと心が輝きだす。甘く柔らかいその笑顔をいつもみてきた。少し幼くて、でもいつも見守ってくれて、きずけばそれが当たり前になっていた。

ああ、いつだってこうしてたかった。こうしたかったんだ、わたしって。

「たくさんいろんなことしたルンね」

「修学旅行、ララと行った時になにしてたっけ」

「UMA達と回ったところを改めて歩いて、えれなとまどかがしてたダイビングをしたルン。夜は一緒に浜辺で歌ったルンよ」

「そうだったよね。どれもすごい楽しい思い出だったなあ」

豊かな生態系が残った沖縄の海を満喫して、クワンソウが咲く花畑でUMAとこのことを語り、星がきらめく夜の海辺で『ながれぼし』のうた』を歌う。

隣にはいつもララがいて、ララといっしょにこの世界では歩めたんだ。

「ど、どうしたルン。ひかる」

「ごめん、なんだか想像するだけで嬉しくてさ」

「ひかるは時々すごい泣き虫ルン。みんなが泣きたくなるような状況だとみんなを引っ張るくらい強いのに、本当に孤独なときはいつも泣いてる。でも大丈夫ルン、わたしがいるルン」

「うん……」

現実味のない理想どおりのララに抱かれ、その好意に甘えてしま

う。

ララの匂い、ララのぬくもり、感じたいな、感じていたいなあ。

「まだ卒業式がはじまってもないのに、泣くの早すぎルン」

「えへへへ」

笑顔でいたい、このまま笑顔で。

そんな想いと暖かい居場所は、だんだんと感覚すらも鈍らせていく。

ここはどこで、ここはどんな場所かは今は知らなくていい、今はまだ……

きがつけば、卒業式がはじまっていた。

ララが卒業証書を受け取っている。ガチガチで緊張しちやってる。そんなところがララぽい。

わたしも卒業証書を受け取った。ララと一緒に卒業できたんだって実感できる。

「これが卒業証書、なんかえらくなったきぶんルン」

目のまえにララがいた。卒業式が終わって、卒業証書を見せあっていた。

「うんうん！ またひとつ成長できたって思えるよね。わたしララと卒業できて嬉しいよ」

「わたしもルン」

「あ、写真撮ろうよ。卒業証書ひろげたときのやつ。カルノリ、写真撮ってよ」

カルノリにカメラを渡して、ララと一緒に卒業証書を広げている写真を撮ってもらった。

「これがこの学校の、地球ではじめての、宇宙人の卒業生。すごいよ、トップバッターだよ」

二人で写真をみていたら、キラやばくなことにきがついた。

宇宙ではじめてのお友達が、みんなのはじめてになっていく。

「みんなに伝えられないのが残念ルン」

「でもいつか伝えられるようにしようよ。たくさんの人達にさー！」  
理想だ。すべてが理想で埋められていく。

「二年三組のみなさん、お集まりいただけましたか」

「およー！ どうしたルンー！」

「実はさ、二年三組のみんなでララの卒業祝いをしたいって思ったんだ」



「ララ卒業おめでとう」

「みんな、ありがとうルン！」

みんなでララの卒業を祝っていると、ふわふわとした感覚は急激に強くなっていく。

幸せとは違う、想像力で生み出したまぼろしの中にいるからなのかもしれない。

意識を保たないと、終わってしまう。消えてしまう。

「写真撮るルン！」

みんなの声は聞こえない。ララの声だけが聞こえ、だんだんと情報が断片的なものになっていく。待って、まだわたしはララといたいのに。

「みんな、みんな、いつまでも一緒だよ。誰もかけることなんてない」  
ララの笑顔、みんなの笑顔がひとつになって溶け合う、最高の卒業式。

「キラやば☆」

これがたとえまぼろしでもいい。わたしは笑顔のままでもいい。それが偽りでも、わたしはまだここで。

「ひかる、また会おうルン。また会えるルン」

ララ、ララ、ララ、ララ、そう叫んでいるはずなのに声にでていない。

なんでさ、どうして理想どおりにならないの！

手をのばしても離れていってしまうララが振り返り、

「ア……リガ、トウ」

あの時と同じ、片言の言葉でララは告げた。

世界は白く輝いた。真っ白な白い世界、どこにでもいくことができ  
る世界。

そこにはもうわたししだけしかない。理想の世界はそうして終  
わりを迎えた。

(わたし、やっぱり……)

夢から覚めると涙がいっぱい溢れでていた。

なんで今日なの。どうしてあんなに幸せなのに、その今がないの。

(叶えたくて、叶えられなくて、全部夢で。わたしおかしいよ。またお  
かしくなってる……ララ、ララ、ララ、会いたいよ)

ひとりですつと大丈夫って思っているのにずつとおかしいまま。

ララのいない卒業式。わたしはどう迎えるんだろう。

## ララのいない卒業式 後編

ぼんやりと眺める空はやけに遠く感じる。小鳥達のさえずりも、やわらかな春の風もなにも教えてはくれない。

桜並木を歩く景色は夢でみた時とは少し違って、まだ桜はつぼみのままだ。

隣にララはいない。あのやさしい笑顔はそこにはない。

それが現実で、その今をわたしは歩んでいつている。

別にララと別れたこと、プリキユアになれなくなったことを後悔しているわけではない。

あのときはあれが最善だと思っていて、いまもそれは変わらない。

それでもすべてが理想通りにはいつていない現実がある。

現実とはつねにその積み重ねだ。理想どおりいかないから理想を追い求めていく。

でもわたしの理想の追い求め方はどこか他の人と違って、いる。

歯がゆい現実に立ち向かっているわけではない、わたしは現実から逃げ出しているだけ。

やさしい夢の中で生きようとしているだけだ。

「ララ」

呼びかけても応えはかえってこない。遠い遠い宇宙にいるララにはこの声は届かない、それが現実だ。

「みんな〜おはよ〜!」

うじうじした気持ちばかりでいるわけにもいかない。教室ではいつもどおりUMAが飛び出てきちやうくらいな元気な声をだした。

「おはよ〜ひかルン」

「みなみ、おはよ〜」

「卒業式もひかルン、元気元気ルン」

「うん、元気元気」

三年で同じクラスになったみなみともお別れか〜

——三年生、始業式の教室にて

「ルンの娘と仲良い娘いたあ! 同じクラスなの超嬉しいよ! 生徒

会長に立候補してから知って、めっちゃきになってんだよ。あ！ わたしはみなみ、よろしくルン！」

「る、るん!？」

「めっちゃかわいいよ〜ね、これ。ルルル、ルン♪」

この子が語尾にルンをつけて教室で話しかけられた時は驚いたなあ。

生徒会長の立候補したあたりから、かなりきになってはいたよう  
だ。

いろいろと目立つとこんなこともあるんだと思えたけど、この出会いはとてもいいものだった。みなみといると落ち込んでいる気分がぱっと明るくなる。前向きになれた。

「そういえば、ルンちゃんとは連絡とれたとれた」

「とつても忙しいみたいで、ここんどこ全然」

ぐつと顔をみなみは近づけてきて、その勢いにおされてしまう。

すごい仲良くなれたけどさすがにララが宇宙人つてことは秘密にしている。二年三組としての秘密であり、そもそもカッパード達と対面していなければとても信じられないことだ。

なによりもここにララがいない。それなのに勝手に話すなんてことはしたくはなかった。

「そうなんだ。卒業式だからきちやったルン！　みたいな感じになれ  
ばいいのにな」

「あはははは」

核心をついてくるというか、感はみなみするどい方。なんだかんだいろいろときずいてそうではあるんだけど。

「あ、来たな金星おぼけ」

「誰が金星おぼけですか」

姫ノ城さんが来ると、みなみはファイティングポーズをとった。この光景もずいぶんと見慣れたなあ。あ、でもこの光景もこれからはみれなくなるのか。

「まったく、みなみさんはあいからわずですわね」

「ええ！ そんなことないよ。卒業式バードジョンのみなみは超スペシャルルン！ このルンルンオーラ、みえる、みえるルンか！」

両手の人差し指をこめかめにあてて、みなみはルンルンオーラをだしているかのようなポーズをとった。

「おほほほほ、その程度のオーラではこの観星中の金星には敵いませんわよ」

「えええい！ だったら観星の銀河のオーラも借りちやうよ！」

「ええ、わたしも」

みなみとつきあっていて新しい発見といえば、姫ノ城さんはよく解らないノリにつきあってくることだ。そのおかげでわたしもつきあわされるんだけどね。

キラキラ星でも降らせるかのように前につきだした両手をふるふるさせる。

「おまえら卒業式にもなってもあいからわづだなあ」

「だね〜」

そんな様子をクラスの人達はいつもどおり楽しそうにみてくれた。いた。

ララがいた二年三組も楽しかったけど、このクラスも楽しい思い出はいっぱいある。

新しい友達も増えて、楽しくやってこれたのは事実だ。

「なにやってるルン」

それなのにララの声が心の中で響いている。

もしこの場所にララがいたらって思ってしまった。

「ど、どうしたひかルン！ 真顔になちやって」

ああ、またこれだ。そうやって誰かに迷惑をかけそうになる。

「ううん。なんでもないよ。卒業したらこういうこともできなくなるのかなあって」

心とは違う言葉をいって、またとりつくろう。

「そんなことないんじゃない。頻繁にはできなくなるかもだけど、お互いそれほど遠い場所にいくわけでもないルン！」

ぎゅつとみらいは手を握ってくれる。その手は少し震えている。

ああ、みなみもさびしいとは思っているんだ。

「うん、そうだよね」

ぎゅつと手を握りさびしさを和らげてあげる。

こうやってララともできてたら……ああ、だめだめ、気持ちを切り替えるんだ。

「でもさ金星お化けは号泣してそう。彼氏彼氏って！」

「あなたはおちよくるんじゃありませんわよ」

「るるるルン♪」

逃げるみなみを姫ノ城さんは追いかけていく。

楽しい。本当に楽しかったなあ。

「おまえら席座れよ」

先生が教室に入ってくると、クラスの中に落ち着きができ段々と卒業式へと意識がきりかわっていく。

そわそわしている人もいれば、妙に落ち着こうとしている人、いろいろだ。

体育館で卒業式がとりおこなわれ、校長先生や来賓の方が話をされてから、卒業証書授与式がはじまった。

一人一人卒業生は名前を呼ばれ、卒業証書を受けとっていく。

えれな先輩とまどか先輩が卒業証書を受け取っていく姿をみていたときは自分のことのようにには思えなかったけど、今こうして自分が卒業証書を受け取る立場になると景色が全然違ってみえる。卒業式は人生で一度きりで、だからこそ特別なものなんだと思える。

特別な時間、特別な想い。それが緊張、感動、期待、笑顔を生み、たくさんの思い出が走馬灯のように駆け抜けていく。

入学して一年生の頃は、まだ一人でずっとU M Aを探しに自電車に乗ってあちこち周り、オリジナル星座をつくって楽しんでいたっけ。他人と関わることに消極的だったけど、一人だからこそ自分の考えがしっかりもてた。

ああしたい、こうしたいって、自分から考えることができた。

二年生になって、ララと出逢ってからはプリキュアと学校生活の両立で本当に目まぐるしく日々だった。

宇宙にだっていけて、夢見ていたことが全部叶ったきになれた。でも宇宙は楽しい場所ってだけじゃない現実を、多種多様な考え方を知った。

多くのことを知る中で自らが考え、仲間と時には協力することで道を切り開いてきた。

三年生の頃は……なにかしないかって気持ちでずつとあるままで、自分なりにどうすればいいかずつと考えてきた。

勉強も運動も上へ上へと目指すようになって褒められました。

積極的いろいろな人と関わっていくことで、新しいことをたくさん知れた。

「したことの無い遊びもしてみたりもした。」

時間のやりくりが大変だったけど、宇宙のこともより深く調べるようになった。

宇宙飛行士のこともたくさん調べた。

宇宙人を待つのでなく、宇宙人をみつけるためにどんなことすればいいのかたくさん調べた。

そのたびにまだまだ知らない宇宙のことを知って、もっともっと知りたいって思っていた。

ララがいなくても、わくわくは消えていなかった。

それでも前に進んでいないと思えるのはどうしてだろう。

「星奈ひかる」

今までのことを振り返っていると、わたしの番になっていた。

「はいー」

席を立ち登壇していく。

この一時を、この時間を大切にしたいと思えるからこそその緊張。心がきらきらと輝いていくのとは違うな。ここまでこれた充実感、心に満ちたりたものが広がっていく。

「卒業証書、星奈ひかる、あなたが観星中学校の全課程を終了したことを証明する。卒業。おめでとう」

卒業証書をうけとり、全校生徒達がいる方へと振り向いた。

泣いている人、少しいくつそうにしている人、まっすぐとみつめ

ている人。

たくさんの表情がそこにはあり、それぞれにこの先の道を歩んでいくことになる。

わたしの道もすでに決まっている。姫ノ城さんが言うとおりにそれを歩んでいくことになる。

それは決して嫌なことではない。

新しいキラやばく☆なこと胸をときめかせていけるだろう。いつだってそうしてきたし、それは変わることはない。

ふと涙している人が目に入り、そこにいないはずのララがみえた。

ああ、今解った。わたしは思い出とお別れするのが嫌なんだ。

ララをここに残していくのが嫌なんだ。

「うおおおおおおお、ひかるン！　ありがとうね！」

クラスに戻ってから最後のホームルームが終わると、みなみに泣き付かれた。

卒業してしまうんだっていう実感が再び芽生え、じんわりと目に涙が広がっていく。

みなみともたくさん思い出がある。プリキュアとしてたくさんのことを経験しあったわけではないけれど、この明るさには救われてばかりだった。

クラスの雰囲気が良かったのも、あの日、あの時、あの瞬間を笑っていたいられたのも、みなみがいてくれたから。

「ありがとう、みなみ」

心からのありがとうを伝えられることが嬉しい。嬉しいよ。

「あなた達は同じ高校ですから、そんなお別れって感じでもないでしょうに」

「そうかもだけさあ、やつぱ中学としてはこれで終わりだもん。そう思ったらね……うおおおおお、ひめるン！　ありがとう！」

「ああもう、そんな泣くんじゃありません」

「ひめるンだって泣いてるよおおおお」

涙している姫ノ城さんも嬉しいって気持ちは同じなのかな。



支えてきてくれたこと、ともに過ごした時間。たくさん思い出をわたし達はつくつてきた。

「ひかるちゃん元気だね」

「また一緒に遊ぼうな」

「みんな、みんなありがとう」

三年生のみんななどのお別れはつらいけど、ありがとうを伝えあえるからこそ前と進んでいける。そこにいてくれるから、伝えあうことができるから、未来へ羽ばたいていけた。

みなみとクラスメイト達と別れ、姫ノ城さんと一緒に廊下を歩く。

まだ在校生が残っている廊下にはざわつきがある。

たくさんのお別れの言葉、たくさんの笑顔。皆がそれぞれに別れを惜しみ、次の道へと歩んでいく。わたしだってそれはできている。

みなみと三年生のみんなとそうやって前に進むことができた。

「なんか不思議だね。卒業式が終わってこんなにも清々しいのに、まだやり残していることがあるなんて」

「そうですね」

それでもまだわたし達はここに残り、やるべき事がある。

一年前に残してきた忘れ物をとりにく。そのお別れは同じようにはできない。

時は過ぎ去り、思い出しか残っていない。交わすべき言葉も、ありがとうも伝えることはできやしないと解っている。

「みんな来てくれるのかな」

不安が生まれ、さつきまでキラキラと輝いていた心は暗闇に染まっていく。

暗い宇宙、どこへいってもなにもみえることがないのは、光すらも吸い込んでしまうブラックホールのような。吸い込まれ、引き込まれ、強くて暗い重力に縛られていく。

「だって今のみんなは別の居場所ができて、すでにそこから旅立っていた。わたしだってそうすることができたよ。でも、でもさ、今からしようとしていることは過去へと戻ることだ。前に歩いていかないと  
いけないのにさ」

不安が後から後から湧いてでてくる。

この日、この時しか、卒業式という日は存在しない。

ララとの卒業式をしたいなんて、わたしのわがままだ。

みんな巻き込まれて迷惑している。いつまでたってもララのことを引きずるわたしになにがあるっていうの。どうしてわたしはいつまでもこのままなの。

「わたしのわがままなんだ、ララとお別れしたいっていうのは。いないのに、なにがお別れなの？　なんでわたしは、なんで……知りたい、知りたいよ、教えてよ」

答えを知りたいのに知ることができない。いつまでも、どこまでも、見えなくて届かない星を追いかけているわたしは愚か者だ。

「あなたはララさんが来たあの頃から、ずっとララさんのことを気にかけていましたね。それこそキラキラと輝く大好きな星をずっと眺めているかのように」

目を閉じて姫ノ城さんはあの頃のわたし達を思い出し、

「そんなあなたがわがままを言うのは当然ではなくて。そしてそれはわたくし達も同じです。なにが自分だけのわがままですか。わたくしはララさんとお別れをしたくて望んでそれをしようとしています。だからあなたが不安になる必要なんてないんですよ」

強く光る金星の光はわたしの中に広がるブラックホールすらも光で照らしはじめる。

見えなくてもそこにある系外惑星のように、ララは見えない場所にいる。

そんなララを感じていたい。ぬくもりを全部全部感じていたい。ララのことずっとずっととみていたい。消したくないんだ。だから不安なんだ。

そしてそれはララとか関わってきた人達の中にもある想いなんだ。「わたし全然みえてないな。他の人達のこと全然。そっか、みんな同じなんだ。わたしだけじゃないんだ」

自分だけじゃないと思えることでたった一つの小さな星は、巨大な星座へと変わっていく。

星はつながり、そして想像することで、より大きな輝きとなる。ひとりじゃない、わたしは歩んでいこう、みんなといっしょに。

「おーし、元気だそお！ お昼食べようよ。おにぎり作ってきたんだ」「ええ、一緒に食べましょうか」

まだ不安がすべて消えたわけじゃない。不安はずっと残り続けている。

けれど不安ばかりが残っているわけじゃない。大きな光。星のように、星座のように、大きな光があるから前へ前と歩むことができた。

\*

\*

\*

お昼を食べ、集場所である二年三組の教室へと続く廊下を歩いていく。ここにも思い出がたくさん詰まっている。

何度も何度も往復して、何度も何度もここを通ってきたっけ。

ララとはじめて通った時はみんなに紹介できるのが楽しみでしやうがなかった。

地球の学校に慣れずにAIに頼ってしまうララと休みの日に学校にいたりもしたな。

それから段々とララも学校に慣れてきて、クラスメイト達とも交流が増えていった。

地球人と同じようにあたり前に話し、当たり前前に勉強し、当たり前前に笑い合う。

月日が進むにつれて、その当たり前前は地層のように積み重なっていく。

宇宙人で、常識や価値観は違うけど、みんなともつながり会えるってことに喜びを感じるようになっていった。

日々の授業だけではない。

中間テスト、体育祭、合唱コンクール、生徒会の選挙、たくさんのお話をララと一緒にしてきた。その度に解らないことを知ろうしたり、ときにはわたしのためにクラスのために頑張ろうとしている姿に、わたしも一緒になって頑張ろうと思えた。

たくさんのララがみえる。ララというわたしの姿も。

きがつけば、教室の扉は目の前だった。

扉に手をかけ、あの頃と同じように扉を開けた。

「おす、星奈。ま、当然星奈は来るに決まってるよな」

「ルンちゃんが一番仲良かったもんね」

集合時間からまだ時間はかなり空いていたけど、クラスメイトの人が10人くらいはすでにいた。

「ララの卒業式、みんなララのために集まってくれたんだ。」

「ちよ、まだ泣くの早いつて」

「え!?!」

きがつけば涙を流している。ああ、わたしすごい安心してたんだ。みんながあ頃と同じようにいることに安心してたんだ。

「あの、すごい安心しちゃって」

「まさか、俺らが来ないとしても」

「えとね……もし一人だったらって考えたりもして」

「そんなことにならないよ。そんな心配するやつだっけ」

「ルンちゃんのことなるとすごい心配するよ、ひかるは」

「あ、そうだったそうだった」

「わたしってそんなに心配してたかな」

「してたしてた。言葉にはあんまだささないけど、ずっと羽衣のこと見たのバレバレだったぜ」

そんなにわたしララのこと心配しているように見えてたんだ。

自分では全然きずかなかったな。ララをみていることなんて当たり前すぎて、全然きずいてなかった。

「心配なさる必要なかったでしょ」

「うん、そうだね」

そうか、わたしってララのことになると周りもみえなくなるし、心配しすぎちゃってたんだ。

卒業式のなつてようやくきづくことがあるなんて、思いもしてなかった。

「よお星奈、ひさしぶり。つうか結構みかけたら話しかけてるし、ひさしぶりってほどでもねえか」

背中を叩いてきたのはカルノリ。ひさしぶりって感じは確かにあ

まりしない。

三年の廊下でよく会うし、その度にいろいろとそれぞれのクラスの話をしていくくらいだ。

「このクラスで会うのはひさしぶりだよ」

「ああ、そつかそつか。ララルンもいてくれたら良かったよなあ」

「あなた、またそんな軽口きいて」

「え、俺なんかまずいこといったか」

ああ、このノリ。カルノリだなあ。軽率だけど芯をついてくる。思ったことがそれほど間違った方向に飛び火してはいないんだよね。

「言ってないよ。ララもいてくれたらって、わたしも思ってるから」

後悔はしていない。だけどララと卒業したかった、ララと三年生も過ごせていたらっていうのもまた本心だ。

いつもなら心の中のブラックホールが光すらも奪いにくるけど、今はなぜだか安心ができる。

二年三組のみんながいて、ララのことを考えていてくれる。

一人じゃない、星座のようなつながりがきつとわたしを輝かせてくれているんだ。

「ここがララの卒業式の会場でよろしいのでしょうか」

「え！ まどかさん！」

カルノリと話していたらまどかさんと

「ちやお！」

「えええええええええ、えれなさん！ 留学してたんじや」

えれなさんが教室に入ってきた。いったいどうなってるの！

「一時的なサプライズ帰国ってやつだよ。ひかるとララ卒業式だからね、お祝いしたかったんだ。卒業おめでとう、ひかる」

「卒業おめでとうございませす、ひかる」

えれなさんとまどかさんのお祝いの言葉をもらい、去年二人をお祝いをした時のことを思い出す。卒業していつてしまうのは寂しかったけど、ララとユニがいないからってその分はりきって二人の新しい道と夢をただひたすらに応援していたな。

「去年かあくわたし達が卒業したの」

「もう懐かしく感じます。ひかるは今はどんな気持ちでいますか」

「どんなか……卒業して、三年生でいたクラスの娘達と別れて、さびしい気持ちはあったけど、みんなそれぞれに新しい道へ進んでいくのが嬉しいし、清々しい気持ちで一杯です」

「解ります。わたしも同じような想いでいました」

「わたしは少し違うかな。みんなと離れるのやっぱりさびしいなって、この笑顔とお別れするのが嫌だなあて気持ちのほうに勝ってたようなきがするよ」

「そうだったのですか」

「表にこそささなかつたけどね。やっぱりみんなの近くにいけないことって、わたしって苦手なんだって思う。今でもそれに慣れきつたわけでもないし。けどさ、新しい場所にも笑顔があつて、その日々も大事だから前に進めている。わたしはすべての笑顔大事にしたい、みんなの笑顔をみていたんだよ」

えれなさんがこんな風に考えていたなんて思ってもいなかった。

いの一番に留学を決めて、自分の夢に進んで、もつと気持ちに折り合いをつけているものかと思っていた。

だけど心の中で自分の中で大事にしたいものと戦ってたんだ。

笑顔の中に隠れているもの、それは誰にでもあるものなのかもしれない。もちろんわたしにだって。

「観星中の太陽でもそう思うものなんですね」

「あれゝわたしのことをなんだと思ってるの」

「明るくて、いつも元気で、観星中の太陽で」

「そうだけど、そうじゃない部分もあるんだあ。もちろんみんなの前では笑顔でいたんだけどね」

笑顔で話すえれなさんは今でも観星中の太陽のままだ。

「キヤー素敵」

「太陽だあああああ」

キヤーキヤーと後ろで女子達と男子達がわめている。これも変わらないな。

「姫ノ城さん、卒業おめでとうございます。生徒会長おつとめご苦労

さまでした」

「ありがとうございます……ございます」

まどかさんのお祝いの言葉を聞いて、姫ノ城さんは流れ出る涙を必死に抑えていた。

姫ノ城さんにとってまどか先輩に祝われるってことは特別なことだ。

生徒会長としてライバル心と憧れをいだき、まどかさんに負けないように自分を貫きこの学校をよくしようとして努力してきた。

三年生になってその努力をより近くでみるようになってきたから解る。

まどか先輩の後を継ぐというプレッシャーにも負けず、姫ノ城桜子として誰からもしたわれるようになった。

「嬉しい、嬉しいよね姫ノ城さん」

「あなたがどうして泣いて」

「だって、近くでみてきたもん。まどか先輩に負けないくらいしたわれるようになるって。だから、だから」

今まで支えてきてくれた姫ノ城さんの涙をハンカチで拭いて、生徒会長らしく凛々しい姿にしてあげる。姫ノ城さんはいつだってそうでなくちゃ。

「三年生、たくさんのお思い出がつくれたのですね」

「はい」

姫ノ城さんと共にうなずき、教室をみわたす。

きがつけば、すでに教室にはたくさんのお生徒が入ってきていた。

「あれ、もう全員いる?」

「みたいだよな」

「おう二年三組全員集合か!」

「みんなララと卒業したいもんね!」

二年三組のみんなが全員来てくれている。

「みんな、みんな来てくれる。来てくれたんだ」

嬉しくて、安心できて、一筋の涙が流星のように流れる。嬉しい、本当に嬉しいよ。

「不思議だよ、こうやってみんながこの場所に集まってるなんて」  
「わたくし達部外者まで含めると、このようなことをしておられる卒業生はいないでしょうね」

「卒業式も、すでに終えていますものね」

「でもさ、こうなるのが不思議って感じばかりでもないって思うんだ。ひかるとララのつながりが生んだ必然、みたいなようにも感じるよ」  
えれなさんが言うように、これは必然なことのようにも感じる。

こうあることがわたし達らしい、だからこうしている。そうありたいから、そう願うからここにいるんだ。

「へくそんな風を感じてたりするもんだな。でさ、ララの卒業式って、結局なにやるんだっけ」

「あなた、それを知らないとは言わせませんわよ。みんなでララに送る卒業アルバムをつくるって言っておいたではありませんか」  
「あくそうだったそうだった」

まどかさん、姫ノ城さん、えれなさんの言葉に皆がうなづく中、カルノリだけはいつもどおりといった感じだ。こうしているのがカルノリらしいちゃ、カルノリらしいけど。

「まずはこの星型の髪にララに贈りたい言葉を書いてくださいな。書き終わった者から写真と星をこの台紙に貼りつけていってください」  
姫ノ城さんの指示のもと、アルバムづくりがはじまった。

「もうなに書くか決めてきた」  
「決めてきたんだけど、卒業した後だからまたなんか変えたくないっちゃって」

すでに書くことを決めている人もいれば、それを換えようとしている人もいる。

わたしもたくさんの事を考えてきたけど、伝えるべき言葉はあの時と変わらない。

自分の力でララと会うって気持ちはなにも変わってはいなかった。続々とクラスメイトは星型の紙に伝えたいメッセージを書いていくと、それを台紙に貼り付け、自分で持ち寄った写真を貼っていく。

「星奈さんは最後にお願ひしますわ」



わたしも台紙に紙を貼ろうとしたら姫ノ城さんに釘をさされた。

「別にそんなきをつかわなくても」

「あなたあつてこそこの卒業アルバムは完成する。そうするのが当然でなくて」

姫ノ城さんは頑固だから、こうなると簡単には考えを曲げない。せっかくだしその気持ちは汲み取ってあげるべきかな。

時間が空いてしまったの、他の人がどんな写真を貼っていくのか調査することにした。

「カルノリ、これは？」

「え、おれの新しい宇宙ギャグだよ。解るか、星奈」

ララの触覚を連想させたいのか、人差し指をピンと伸ばした両手を頭の上のせていた。

「伝わらないと思うよ」

「嘘だろ、ビビット光線でてると思うんだけどな」

カルノリから特別なことをなにかしようって感じはしない。自然体なのがカルノリらしいな

「姫ノ城さんはどの写真を選んだの」

「これですわ」

姫ノ城さんの写真にはわたしとみなみが写っている。

「今までの友達も、新しい友だちも大切にしている姿をララさんには伝えたいと思いましたので」

姫ノ城さんはわたしのことも考えてくれているんだ。自己主張が激しいときは多いけど、誰よりも他人のことを考えている姫ノ城さんらしいなあ。

「へくでもさ、姫ノ城といったらあれじゃね」

「あれだよな」

「なんですの、あれって」

「彼氏に決まってんじゃない」

「あ、それぞれ。ルンちゃんにも伝えないとだよ」

「え、まじ！ 姫ノ城、彼氏いんのかよ」

「カルノリ、おめえ知らねえのかよ。一年生のやつで頭もいいぜ。め

「ちや熱苦しいってきくけど」

「あなた達、うるさい、うるさいですわよ！」

あははっは、彼氏の話になるとやっぱにぎやかになるなあ。やっぱ離れたっていつても前のクラスメイトのことは気にしているもんなんだ。

「えれなさんはどんな写真を選んだんですか」

「わたしは今のホームステイ先の家族と一緒に写っている写真かな。新しい家族、新しい場所、それがすごい新鮮で笑顔になれるから」

「笑顔がたくさん、えれなさんらしいチョイスだと思います」

たくさんの笑顔の中で太陽のように輝くえれなさん。環境は変わっても楽しく笑顔で頑張っている姿に自然とほころんでしまう。これを見るララもきつとそうなるんだろうな。

「まどかさんは？ あれ、ロケット」

「今、宇宙工学の方に興味を持っておりますので、そのことを伝えてくて」

「そうだったんですか！ キラやば☆」

「へえ、まどかが」

「わたしもララと会いたいですから」

「そっかあ」

まどかさんもあの頃から自分の進みたい道をはっきりと決まってきた。それがわたしと交わるような道になりそうなのはすごい嬉しいなあ。

「ひかるはどんな写真にされましたか」

「勉強している姿を選びました。自分の力で会いに行くよってこと伝えたくて」

「気持ちと同じですね」

「はい」

みんなの写真をみていくだけで、各々に伝えたい思いが伝わってくる。

台紙にはられた星をみていくと、さらにそれを感じることができ

『突然いなくなったのさびしいけど、ずっと友達だよ』

『いつでも戻ってこいよ、待ってるからな』

『全国大会優勝した、すげえだろ』

みんなへのララへの想いは星のようにキラキラと輝いている。

このアルバムはそんな星を星座のようにつなげてくれる。みんなのトウインクルイマジネーションをつないでくれていた。

「トウインクルブックって、みんなで作れるものだったんだ」

「わたし達の想いの重なり、想いがあればこそです」

「これを見てララの笑顔、みてみたいなあ」

「ええ、絶対に見てみたいです」

「うん」

たくさんの想いの重なりがこころの中の宇宙を輝かせる。

不安に思っていた気持ちはきえ、未来へと前を向けている。今ならララと向き合える。向き合いたい。

「アルバムも残すは星奈さんの星を貼るだけ。そろそろララさんの卒業授与式をはじめましょうか」

「つうてもどうやるの」

「星奈さんがそれを考えてくれます。できますわよね」

姫ノ城さんから卒業証書をうけとり、うなずいてみせる。

ララに卒業証書をとどける。そこにみえなくても、そこにいなくても、想いは届くと信じて。

「卒業証書授与」

姫ノ城さんの声をきいて、皆がしずまりかえる。

厳かな雰囲気は卒業式の時と変わらない。みんなが見守ってくれているのも。

ララの名前が書かれた卒業証書を手に、ララの机の前と立った。

そこにはララはいないけど、みんなのイマジネーションがララをそこにいさせてくれる。

ララ、みえる。ララが。

「卒業証書、羽衣ララ。ララは宇宙人としてはじめてこの学校に通い、たくさんの経験をしてきたよね。そのどれもがはじめてで大変だっ

たよね」

「これはどんな意味ルン」「なんでこんなことをするルン」「これ、すごく楽しいルン」

不思議そうな顔をしているララ。はじめてのことを楽しそうにするララ。それがララだった。

「それでもララはその経験の中でたくさんのもので、みんなにたくさんの笑顔を与えてくれたよ。支えるわたし達もララといられることが楽しくてしかたがなかったんだあ」

楽しくない日なんてなかった。ララと一緒にいられること、それはわたし達にとつての宝物だ。

「ララと過ごした時間は全部全部かけがえないものだった。ララ、この学校に、この地球に来てくれてありがとう」

ララと別れてからララのことを思わない日はなかった。ララといたいはずと思ってた。

だから言うよ。わたしはわたしだ。イメージネーションを輝かせ、ララに伝えるんだ、この言葉を、この想いを。

「ララ、卒業おめでとう」

そこにはいない、心の中で輝くララのために卒業証書を机の上に置いた。

涙が溢れ出てきて止まらない、涙で顔がぐしゃぐしゃだ。

ああ、言えた。わたしようやくララと向き合えた。ちゃんと向き合えたんだ。

すすり泣く声が聞こえる中で、涙をぬぐい深呼吸をする。

まだ終わってない。まだ終わらせない。

「みんな、聞いて欲しいことがあるんだ。ララと別れた時のこと、プリキユアとして戦ったときのことをみんなに話したい。それがわたしのけじめ、みんなに対するわたしのけじめだから」

ずっとずっと話せていなかった、ララと別れた日のことを話す。

信じられないようなことを話す中で、誰一人わたしの話を疑う人はいない。誰もがその話を真実として受け止めてくれている。

「そっかあ、大変だったんだね。今まで」

「ルンちゃん、ルンちゃん」

真相を聞いて涙する人も多くいるけど、それは悲しいからじゃない。

知れたから、なにがあって、どんな気持ちでいるのかを知れてからだ。

「わたしこそ、今まで話してこなくてごめんね。みんなもララのこと心配してくれたのに」

「いいよ、星奈がつらいの解ってたし」

「つらいのに、それを聞き出そうなんてことできなかったよ。友達だもん」

ずっとみんなにはもやもやとした気持ちのまままでいさせてしまったけど、話せてよかった。

暗闇の中に埋もれてしまった忘れ物を届けることで、清々しい気持ちになっっていく。

迷って、落ち込んで、泣いてばかりだったけど、わたしはその迷いや涙も意味があるものだったと今なら思える。そうか、わたし成長できたんだ。成長できてるんだ。

ララに送る卒業アルバムに星を貼りつけて、ララに送る卒業アルバムを完成させていく。

『ララに会いたいわって気持ちはあの頃から変わってないよ。』

ララに会う、会いに行くから』

そう、あの頃と気持ちは変わっていない。変わっていないけどわたしは成長している。今はそう自信をもつていいきれる。たくさん仲間達がいって、新しい可能性を発見できたから。

「わたしき、宇宙人飛行士になってララに会いに行くよ。ララと約束したんだ」

胸をはり、みんなにも宇宙飛行士になることを伝えた。

「星奈が宇宙飛行士。まじか〜」

「わたし達応援するよ」

「絶対やれるって」

ララと約束したからだけじゃない。みんなも応援してくれている。

わたしはこの夢を夢で終わらせない。つなげるんだ、わたし自身の力でこの夢を。

「みんな今日はあつまってくれてありがとうございました」

ララの卒業式が終わると、

「それじゃあな、星奈」

「ひかるちゃん、元気でね」

手をふり、また一人また一人と、二年三組のみんなはそれぞれの道へと進んでいく。

さびしい気持ちはあるけれど、清々しくその後ろ姿をみてられる。三年生と別れた時と同じ、みんなと別れることを祝えているからだ。

「二年三組、すごい素敵なクラスだったんだね」

「ええ、みなさんがララのことを思ってくださって嬉しかったです」

きずけばもう夕暮れどき。茜色の木漏れ日が教室を包んでいた。

「えれなさん、まどかさん、今日は来てくださってありがとうございますございました」

「ありがとうを言うのはわたし達だよ」

「ええ、本当に素敵な卒業式でした」

えれなさんとまどかさんはプリキュアとして戦い、今でも交流がある。

時折話すことも多くてさびしさを感ぜないけど、この場所に来てくれたことには意味がある。

わたし自身のけじめをみせれた。ララに言葉を送れたのだから。

「それじゃあ、まどかわたし達もいこうか」

「ええ」

えれなさんとまどかさんもまたそれぞれの道へと進んでいく。

「姫ノ城さん、ありがとう。わたしのために色々準備とかしてくれて」「わたくしは元生徒会長。生徒達望みを叶えるのが仕事。それにわたしがしたくてやったことです。あなたは堂々としていればよいのです。観星中の銀河なのですから」

姫ノ城さんには感謝してもしきれないな。

ずっと心配をかけて、悩みをたくさんぶつけてきた。

もし姫ノ城さんがいなかったら、わたしはララと向き合えきれいなかったかもしれない。

「姫ノ城さん、これ」

「これは？」

「金星だよ。姫ノ城さんのために作ったんだ」

手渡したのは「ありがとう」と書いた金星の缶バッジ。今までのわたしなりのお礼。わたしなりの感謝の気持ちを込めてつくった。

遼じいにも手伝ってもらって、上手くできたと思う。

「大事にさせていただきます」

「うん」

姫ノ城さんとは違う高校だ。それぞれの道を進んでいくことになる。

それでいい。それがいい。わたし達は道が違っているからお互いに輝けるんだ。

「三年のお別れ会に行く前に寄っていきたいところあるから、少し校門の前で待ってて欲しい」

「わかりましたわ」

理由は特に姫ノ城さんは聞いてこない。

わたしがそうしたいのなら、そうさせてくれる。それは変わることはない。

教室には一人きり。ララの机を見つめてからわたしも教室を出た。

茜色に染まる廊下は、ララが宇宙人だと疑われた日のことを思い出す。

辛くて、苦しくて、ずっといつしよにいたい、みんなにも解つてもらいたいって思ったあの日。それは辛い日でもあったけど、みんなにはじめてララが宇宙人だと話せた嬉しい日でもある。見方が変われば世界はどんなに風にも変わっていく、それがわたし達だった。

「懐かしいなあ」

図書館に入ると、あの日のわたし達がみえる。

ぎゅっとララを抱きしめて、もう絶対に離したくないって思った。

あの時はきずかなかったけど、あの時なんだ、わたしがララに友達

以上の感情を抱いたのは。

苦しくて、悲しくて、それでも大切にしたい想い。それはわたしの  
中で大きくなっている。

「ララもこうして窓の外をみつめてたなあ」

強く強く抱きしめた後、わたしはずっとララをみていた。

ララだけを見たいって思っていたから。

けれどあの時のララは、わたしではなく広がる夕空をみていた。

あの頃はまだその理由が解らなかったけど、今のわたしなら解る。

ララはあの頃から、もう考えていたんだ。この先もわたし達が側に  
いるためには、多くの人に理解してもらわないといけないということ  
を。

側にいる誰かではなく、その先の未来を切り開くことでしか得られ  
ないものがあるというのならわたしも誓おう。あの宇宙に、見えない  
星空達に。

「待っててね、また会いに行くから」

夕空に言い放つ言葉は空に溶けて、星空へとまぎっていく。

系外惑星のように今はまだ見ることのできない、ララに届け、届け、  
届け。

わたしの中で想いは膨らんでいき、会いたいという想いが膨らむた  
びにキラキラと心は輝いていく。わたしの中で生まれたそれは、もう  
誰にも止めることはできない。

甘くて、切なくて、ララを想うたびに生まれでた感情をわたしはラ  
ラに届ける。

「大好きだよ、ララ」